

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | ゲーテの「ファウスト」における宝の概念   |
| Sub Title        | Das Schatzmotiv in Goethes „Faust“  |
| Author           | 小林, 邦夫(Kobayashi, Kunio)  |
| Publisher        | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会   |
| Publication year | 2010  |
| Jtitle           | 慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.25 (2010. ), p.295- 324   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         | ゲーテの「ファウスト」において、「宝」という言葉がどのように用いられているかを調べてみると、作品中の多くの箇所に見られ、様々な意味合いをもって用いられていることが判明した。本稿では、この「宝」という言葉の用い方を多少整理した形で示してみようと思う。そのことによって、この言葉が作品中においてどのような役割を果たしているかが明らかとなってくるであろう。尚、「宝」を表現する言葉はドイツ語ではSchatzであるが、その他にも、金銀財宝、地所、貨幣、宝石、その他貴重な物、大切なこと、大切な人等を表現する言葉、あるいは事柄も、この「宝」の中に含めることとした。 |
| Notes            |   |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20100531-0295">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20100531-0295</a>   |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ゲーテの「ファウスト」における宝の概念

小林 邦 夫

ゲーテの「ファウスト」において、「宝」という言葉がどのように用いられているかを調べてみると、作品中の多くの箇所に現れ、様々な意味合いをもって用いられていることが判明した。本稿では、この「宝」という言葉の用い方を多少整理した形で示してみようと思う。そのことによって、この言葉が作品中においてどのような役割を果たしているかが明らかになってくるであろう。尚、「宝」を表現する言葉はドイツ語では *Schatz* であるが、その他にも、金銀財宝、地所、貨幣、宝石、その他貴重な物、大切なこと、大切な人等を表現する言葉、あるいは事柄も、この「宝」の中に含めることとした。

## 第一章 メフィストと宝

1. グレートヒェンと宝石：はじめに、「ファウスト」第一部における悲劇のヒロインであるグレートヒェンと「宝石」との関係に注目してみることにする。グレートヒェンは就寝前、箆笥をあけて、脱いだ着物をしまおうとして、宝石入りの小箱を見つける。「まあ、こんな立派な！／わたしいままでみたことがない。／これは宝石 (*Schmuck*)。どんな貴婦人だっ／これをつけて晴れの祝いの日に出かけられるわ。／この鎖 (*die Kette*)、わたしに似合うかしら。／こんなすばらしいもの、いったい誰のだろう。(それを身につけ、鏡の前に立つ)／せめてこの耳飾り (*die Ohrring'*) だけでも、わたしのものだったら。」(2790/「夕」) この宝石の

小箱は、グレートヒェンに一目惚れしたファウストが、メフィストに依頼して、調達させた最初の贈り物であった。グレートヒェンの母親はこの宝石類（腕輪 Spange, 指輪 Ring', 鎖 Kett'）(2843/「散歩」)に不浄なものを感じ取り、坊主を呼び、教会に寄進してしまう。ファウストはメフィストに新しい宝石類を持って来ることを命じる。今度は母親に知られずに済み、隣家のマルテおばさんのところで、首飾り（Kettchen）や真珠の耳飾り（die Perle ins Ohr）(2891/「隣の女の家」)を身につけて楽しむ。グレートヒェンもごく普通の女性としてこの宝石類を受け入れている。女性にとって宝石類は身を飾るものとして最適で、非常な魅力を持つものようである。ファウストの誘惑は、宝石を手段としてグレートヒェンに迫るものであったと言えるが、「ワルプルギスの夜」で小道具を売る魔女が、「おしとやかなご婦人がたをたらしこんだことのない飾りの品（Schmuck）もなければ……」(4107/「ワルプルギスの夜」)と、そのことをほのめかす場面がある。ファウストも人の子、ごく普通に女性に接近しただけのことでもあろう。そのファウストは、グレートヒェンと初めて出遭ったその直後には、今すぐにでも彼女を手に入れるようにメフィストに要求する。それは無理な注文だと分かると、「それなら、あの天使（Engelsschatz）の身につけているものを何か手に入れてくれ、」(2659/「街」)と、またまた無理難題を押しつける。ドイツ語では「天使」は「天使の宝」と表現されていて、グレートヒェンは「天使のような人」であることを指している。「宝」（Schatz）は、「大切な人」の意で、恋人や夫婦間で用いられている言葉でもある。また、この言葉はすでに、「魔女の厨」において、メフィストによって語られていた。「そのうちに、こんなかわいいのを（Schätzchen）あなたのために見つけてあげますから。」(2445/「魔女の厨」)その予言は実現したのであり、またグレートヒェンは事実、この作品全体の中では「宝」と呼ばれるに相応しい女性として描かれていよう。

2. 黄金の主神マモン：一年に一度ブロッケン山で行われる「ワルプルギスの夜」の祭典の主役は、勿論魔女たちであるが、その背後に君臨していると考えられるのは、マモンの存在であろう。マモンは「地下の黄金」を意味し、またその黄金を偶像化して、「黄金の主神」の意にも用いられる。聖書にもすでにある言葉で（マタイ、6-24）、私利私欲、強欲の権化の意でも使われる。「ワルプルギスの夜」では、メフィストがファウストを案内する。「ここがつまり中の峰で、／深い谷間にマモン〔黄金〕（Mammon）が輝いているのがよく見える。／どうです。びっくりするでしょうが。」（3913/「ワルプルギスの夜」）金の砂（goldner Sand）を撒いたように火花が飛び散り、頂上かけて一面の火におおわれている。メフィストは、「今夜のまつりのために、／マモン〔黄金の王〕（Herr Mammon）が、思いっきり豪華に宮殿を照明したのかもしれませんがね。」（3932）と説明する。魔女の性の狂宴の舞台はマモンが演出しているのである。「大ぜいが魔王のところへ（zu dem Bösen）集まるのだ。／あそこへ行けば、いろんな謎が解けるだろう。」（4039）と、ファウストはマモンのいる頂上の方に行きたがるが、なぜかメフィストはそれを阻止し、ファウストをわき道に誘導する。「ワルプルギスの夜の夢」ではそのところを、懷疑論者が補足する。「この連中は、あの小さな焰たちのあとを追っかけて、／それで宝（Schatz）が見つかると思っている。／だが『魔神』（Teufel）に合う韻は『疑心』（Zweifel）だけだ。／だから、疑うわしこそ、ここにいるのがふさわしいのだ。」（4359/「ワルプルギスの夜の夢」）超自然論者（Supernaturalist）、その他の後を受けての懷疑論者の台詞だが、問題は「ワルプルギスの夜」の魔的な世界、それをそれぞれの立場でどう解釈するか、それが話題となっている。ファウストも、小さな焰たちのあとを追いかけたとしても、そこに宝が隠されているかどうか、疑わしいというのである。このマモンは、すでに「書齋」の場でもファウストの口から出ている。「財宝を餌に（mit Schätzen）、われわれを向こう見ずな行為へそのかす一方では、／無為安逸にふけらせようと、／やわらかな褥

を敷いてわれわれをいざなう／黄金の神 (Mannon) をおれは呪う。」(1599/「書斎」) マモンはこのように、「安逸」を求めての「富」と「強欲」を象徴するが、「ワルプルギスの夜」では「性」と「悪」との関連におけるマモンが強調されているように思われる。マモンの「金」には魔女とメフィストの世界が強く関わっているからである。

3. 富の神プルトゥスと黄金の櫃：「第二部」の宮廷でのカーニヴァルで、少年御者が操る「四頭立ての籠車」の上の玉座に威風堂々と座しているのが、富の神プルトゥスである。少年御者との問答がややあって、プルトゥスは車から降りる。籠たちは黄金入りの櫃 (die Kiste mit Gold) を、メフィストが扮する強欲男もろとも、車からおろしてかついで来る。プルトゥスは、「さて、宝 (die Schätze) を開放する時が来た。」(5709/①「大広間とそれにつづく数々の次の間」) と宣言し、触れ役の杖を借りて叩き、櫃の錠を開ける。すると、青銅の釜や鍋の中 (in ehernen Kesseln) に、さまざまな品物が黄金の血潮とともに (von goldnem Blute) 煮えたぎっているのが見える。冠 (Kronen), 鎖 (Ketten), 指輪 (Ringen) などの装飾品 (Schmuck) だ。そしてその液は沸騰して、何もかも溶かして溢れ出そうな勢いであった。金無垢の器 (Gefäße, goldne) が溶け、たばねた貨幣 (gemünzte Rollen) がころげ回り、バラの金貨 (Dukaten) が鋳型から打ち出されるようにピョンピョン飛び出す。まさに「宝」の開放である。ここでもメフィストが扮する痩せこけた男が初めは儉約 (Avaritia), 次には貪欲 (Geiz) と名乗り、この富の神プルトゥスの車に同乗していたことに注目したい。儉約も余りに度が過ぎれば貪欲となるが、金銭感覚に魔が差せば、貪欲に走る傾向にあるのかも知れない。よく言えば、ドイツ的な節約の精神である。いずれにしても、そこにメフィストがいる。富と貪欲とが一緒になっている。

4. 大神パーンとそのお供たち：仮装舞踏会の最後のグループとして登

場するのは、大神パーンとそのお供たちである。パーンの大神は牧人と家畜を保護する神。パン (pan) は「全」を意味するが、全てを支配する神という意味合いで、皇帝がこのパーンに扮している。そのお供には、森の神ファウンたち、森の神サテュロス、土の精グノームたち、巨人たち、水の精ニンフたち（合唱）がいる。それぞれ役割分担があるのが面白い。まず土の精グノームたちが宝を掘り出す。その護衛にあたるのが巨人たちである。そして、その他の者たちが大神パーンを讃える役を受け持っている。小人の土の精グノームたちの台詞：「あふれる鉱脈からどんどん汲みだす。／『元気で行けよ』と励ましあって、／掘っては金銀 (Metalle) 積み上げる。／これも世のためを思えばこそ、／わしらは善人のよい友だち。／だがせっかく掘り出したこの金 (das Gold) も／盗みや取り持ちのもととなる。／幾百万人殺しても平気な男に／鋼 (Eisen) をもたせることになる。」(5851/④「大広間と……」) 危険を冒しながら勤勉に働くグノームたちだが、折角掘り出した金銀が世の中でどのように使われるか、不安でもある。土の精グノームの代表者は、「宝」を頒ち与える大神パーンを讃えて：「そのときわたしたちは岩深く穴をうがち、／そこをわが家として励みます。／そのようにして得た宝 (Schätze) を風さわやかな明るい地上で／あなたは恵み深く人々にお願ちなさいます。」(5902) 「宝という宝 (jeder Schatz) はあなたのお手にあってこそ、／あまねく世の幸となるのでございます。」(5912) 金を掘り出すグノームたちと、それを護る巨人たち。純粹に金の採掘の場面が描写されているが、お供のものたちのエロチックな面も感じられよう。森の神ファウンたちとサテュロスは、上半身は人間、下半身は山羊で、角とひずめを持つ森の神であり、快樂を好む好色漢でもある。金にまつわるメフィストの役を、彼らが演じていることになる。

5. 蟻たちとグライフたち：グライフは想像上の動物で、鷲の頭と翼、獅子の身体を持つ怪鳥。蟻は巨大な形の蟻。「第二部」の「古典的ワルブ

ルギスの夜」の場面のペナイオス川の上流で、メフィストが最初に出遭う怪物たちである。グライフは：「女（Mädchen）でも、王冠（Kronen）でも、金（Gold）でも、手のとどくものはどどんつかんで大食らいするにかぎる、／大食らいするやつには、たいてい、幸運の女神が笑顔を見せるものだ。」(7102/②「ペナイオス川の上流」)と威勢がいい。対して蟻は：「お金（Gold）の話ができましたね。私たちはうんと貯めこんで、／岩の裂け目や洞穴にしまいこんでおきました。」(7104)と、宝（金）を集め、貯えるのが仕事であることが分かる。ファウストも姿を現わし、この蟻たちとグライフたちに目を留めて言う。（蟻たちに目をそそいで）／「これらが天下の至宝（der höchste Schatz）を集めたのだ。」／（グライフたちに目をそそいで）／「それをこれらが忠実に抜かりなく護ったのだ。」(7187)グライフたちは、蟻たちの集め、貯えた宝を護るのが仕事なのである。グライフたちはそれを自覚し、蟻たちを激励し、また自らの役目に自信を持っている。グライフの言葉：「薄紙の金（Gold in Blättchen）、散らしの金（Gold in Flittern）が、／地震で出来た裂け目の壁にちらちら見える。／こういう宝（Schatz）をほかの者に取られまいぞ。／蟻ども。さあ、掻き出せ、掘り出せ。」(7582)「運べ、運べ。山ほど金（Gold）を積み上げろ。／それをおれたちは爪で押える。／錠前がとびきりいいから、／どんな宝（der größte Schatz）でも保管は確かだ。」(7602)この構図は、土の精ゲノームたちが掘り出し、その護衛にあたるのが巨人たちであった、大神パーンの宝の場合と同様であると言えよう。

6. メフィストと宝：これまでの考察からも窺えるように、宝にはメフィストという存在が見え隠れしている。宝石には不可思議な魅力というものがあ、それはときには魔力ともいえる力を発揮する場合もあろう。その「魔」をメフィスト的要素、と名づけることもできよう。事実、グレートヒェンの場合は、その力によってファウストとの恋に落ちたのである。ファウストの男性的な魅力に強く心を奪われたとはいえ、グレートヒェン

はすでに宝石という魔力の洗礼に遭っており、恋する心は芽生えていたのである。そしてその宝石を探し出したのはメフィスト本人であった。黄金の主神マモンの場合、ワルプルギスの夜という性の狂宴の中心人物であり、その金は性そのものを象徴する金として、すでにはじめからメフィスト的要素である。むしろ性の誘惑者としてのメフィストの分身といってもよいくらいであろう。富の神プルトゥスには、役柄の上ではあっても、直接メフィストがまつわりついていた。大神パーンには、エロチックな森の神ファウンたちとサテュロスが、常に騒がしいお供として一緒である。蟻たちの集めた宝を護るのはグライフであるが、そのグライフは「女でも、王冠でも、金でも、手のとどくものはどんどんつかむ大食らい」と自ら告白しているように、性と金とを同一視しているところがある。それはメフィスト的要素とみなしてよいであろう。

メフィストと宝の関係について、更に証言を集めてみよう。「書齋」の場面で、ファウストと契約を結ぶ前に、メフィストはファウストの要求に答えて：「そんなご注文には驚きませんよ。／お望みならそういう珍物も (mit solchen Schätzen) ととのえます。」(1688/「書齋」) と言う。ファウストから、「街」の場面で、グレートヒェンに何か贈り物を用意するように頼まれたときに、「おれにはあちこちいい場所の心あたりがある。／そこには昔からいろいろな宝物 (Schatz) が埋まっているのだ。／どれ、ちょっと検分しなきゃなるまい。」(2675/「街」) とメフィストは独白する。ヴァレンティンと決闘をする直前の「夜」の場面では、宝 (Schatz) が土の中から迫り上がってくるのを目撃し、メフィストとファウストは次のような対話をする。M：「ええ、もうすぐですよ、／あなたが大喜びでその鍋 (das Kesselchen) を持ち上げるのもね。／こないだ、ついでにちょっと覗いてみたが、／中には、獅子の紋章入りの金貨 (Löwentaler) がどっさりとありましたぜ。」 F：「あの娘が身につける／宝石 (Geschmeide) や指輪 (Ring) のようなものはないか。」／M：「そんなものもありましたぜ。／なんだか真珠をつないだ紐 (Perlenschnüren) の

ようなものがね。」／F：「それで結構。贈物も持たずに／あれのところへ行くのは、気がさすからな。」(3666/「夜」) グレートヒェンへの贈り物は二度に留まってははいないようである。このように、メフィストは宝のありかを知っている。また、「第二部」の「玉座の間」では、自らを「宝のありかに通じた者」(der Schatzbewußte) (5016/①「玉座の間」) と評している。更に、「第三幕」のヘレナは、「でも、お前はすぐに王さまからこの管理の役に取り立てられて、／城(Burg)も戦利の財宝(kühn erworbenen Schatz)もあずかる身になったのだね。」(8866/③「スパルタのメネラス王の宮殿の前」)とフォルキアスとなったメフィストに言っている。フォルキアス・メフィストはメネラス王の城と財宝を管理する身の上であり、宝を護る立場でもあると言える。そのヘレナはメネラス王から「その老女に案内させて、豊かに集められた宝物(der Schätze reiche Sammlung)をいちいちお前の目で検分するのだ。」(8552)という命を受ける。老女とはフォルキアス・メフィストのことだが、ヘレナとは対照的に「夜の生んだ醜い怪物」(die grausen Nachtgeburten) (8695)と呼ばれるほど、その姿は身の毛もよだつほど恐ろしく、醜悪である。ヘレナは更に、「わたしは腹立たしい思いでその女に背を向け、／階段へ急いだ。そこを昇れば、夫婦の床(der Thalamos)が、／美しく飾られて高々と設けられ、その隣が宝物室(das Schatzgemach)になっている。」(8684)と語る。ここでは、太古からの暗闇が生み出した異形のものと同遭った恐怖と、夫婦の床と宝物室とが微妙に絡み合って、メフィストの世界が現出していよう。

## 第二章 幸福論と宝

1. 金：「第四幕」において皇帝は、謀反を抱いた反皇帝軍との戦に勝利し、僭帝の天幕に入り、語る。「ここにはえせ玉座が空しく残骸をとどめて、裏切者の財宝(Schatz)が、／絨毯にくるみこまれたまま、あたり狭しと置かれている。」(10851/④「僭帝の天幕」)しかし、すでに味方の

兵卒であるくすね (Habebald) とはやとり (Eilebeute) によって、財宝の一部がくすね採られていた。その場面を再現しよう。くすねが言う：「まあ、宝もの (Schatz) が山のように。／どれを先に取りようかしら、どれをあともわしにしようかしら。」はやとりも興奮気味に言う：「これは兵隊に払う給金で、／中身は金貨 (lauter Gold) ばかりだ。」(10801) 「見ろ、中はピカピカの金貨 (das rote Gold) がいっぱいだ。／早く取り込め、つかみこめ。」(10809) 前掛けに金貨を詰め込んだくすねに対して、はやとりは：「だめだ、だめだ。前掛けに穴があいたぞ。／おめえ。歩いても、とまっても、／金 (Schätze) をばらばら撒いているじゃねえか。」(10814) と注意する。そこに味方の皇帝側の親衛兵たちが入って来て一喝する：「この神聖な場所で何をしている？／なぜ陛下の財宝 (Kaiserschatz) に手をつけるか？」(10817) 戦争行為は、大義名分はともかく、宝の奪い合いである。その最中であっても、不正を犯す者が出て来る。これが現実というものであろう。

2. 宝探しの旅：ヤーゾンの指揮のもとにギリシャの英雄たちが、アルゴ船に乗って「金羊毛皮」(das goldne Vlies) を求めて航海した、いわゆる「アルゴ船の勇士たち」(Argonauten: 7340/②「ペナイオス川の下流」) についての話題が、半人半馬のヒーロンに跨ったファウストの口から出て来る。これを「宝を求めての旅」と名づけることが許されよう。グレートヒェンの隣の家に住むマルテの夫は、目下蒸発して不在である。そこに目をつけたメフィストは、その夫の旅先での話として、「わたしたちの舟は、サルタンの／宝 (Schatz) を積んだトルコの船をつかまえた。」(2974/「隣の家の人」) という夫の体験談をマルテに話す場面がある。これも、たとえそれが違法行為であっても、「宝探しの旅」であることに変わりはないであろう。メフィストにあっては、はっきりとした海賊業である。「御託をいうより、／宝もの (die Kostbarkeiten) を／上の広間広間に／並べ立てろ。」(11205/⑤「宮殿」) 「戦争、貿易、海賊業 (Piraterie),

これは神聖な三位一体で、／切って離せるものじゃないんだ。」(11187)とメフィストは号令をかける。我々の人生も航海。それぞれが理想とするものを求めて、素晴らしい宝を求めての旅であると言えようか。「ファウスト」の物語全体も、ある意味で、この人生の旅における「宝探しの旅」と捉えられるところがある。「宝」が問題なのである。最深最奥に秘められた宝とは何か？それを求めての「ファウスト」の物語ではないのか？と読者は容易に想像することができよう。

3. 金銭とその使用法：「全てが金 (Gold) を求め／全てが金 (Gold) 次第なのが／この世の中。ああ、私たち貧乏人は。」(2802/「夕」) 清純なグレートヒェンは、宝石箱を贈られて、貧しい身の上を嘆きこう言った。「金」Gold は、金 (金属のきん) でもあり、金 Geld (金銭のかね) でもある。グレートヒェンは金 (きん) を意味する Gold と言ったのだが、この場合「お金」のことであろう。この世の中、「金がものを言う」ことは周知の事実であろう。では、お金はどのように使われているか、再建なった皇帝の居城での場面で見てみよう。まず、金貨に代わって紙幣が誕生する様子がある。「この一札は一千クローネン (tausend Kronen) に通用す。」(6058/①「遊苑」)「帝国内に埋蔵せられたる／無量の財宝 (Unzahl vergrabnen Guts) をもってその担保となす。」(6059) 地下に埋蔵する金はその担保である。「そしてこれからはご領内の隅々まで、／宝石 (Kleinod) も金 (Gold) もお札 (Papier) もありあまることになりましよう。」(6129) と再建の立役者メフィストは結ぶ。そして皇帝は、宮廷内の臣下に紙幣を配り、めいめいこれを何に使うかを尋ねる。するとそれぞれの答えが返ってくる。①小姓：「わたしは、陽気に、たのしく、好きなことをして暮らします。」②他の小姓：「わたしはさっそくあの子に鎖 (Kett') と指輪 (Ring) を買ってやります。」③侍従：「これからはわたしは倍上等の酒を飲みます。」④他の侍従：「わたしのポケットのなかでは、さいころがもう、うずうずしております。」⑤方旗騎士：「抵当に入ってい

る屋敷と田畑を受け出します。」⑥他の方旗騎士：「これまで貯めた分に繰り入れます。」(6145～6150) これに対し「阿呆」の考えは：「田畑や家や牛馬の入手，また森，猟場，養魚場つきの城を入手する。」(6167)である。以上を総括してメフィストは：「ここの利口者はあの阿呆ひとりだ。」(6172)と，阿呆の考えを大いに評価する。「阿呆」が「利口者」，という皮肉でもある。いずれにしても，この場面での宮廷の家臣たちの陳述は，典型的な金の使い方を示しており，おおよそ人間の抱く欲望を表している。それも，とりあえず，金銭の上に成り立っているのである。

4. 幸福論と宝：金の使い方はそのまま，その金を使う人の価値観の違いであり，何を幸福と受け留めるか，というその人なりの幸福論の問題となつてこよう。従つて，上に述べられた金の使い方は，そのままそれぞれの幸福論となっている。①小姓：陽気で，楽しい，気ままな生活を信条とする。②他の小姓：恋と愛に生きる生き方。「買う」にも当たる。③侍従：飲み食いに生きがいを求める人。「飲む」に当たる。④他の侍従：賭博に走るタイプの人。「打つ」に当たる。⑤方旗騎士：借金，負債の返済。律儀な人。⑥他の方旗騎士：貯金をするタイプの人。蓄財漢。(6145～6150) さて，これらの金の使い方は，非常に現実的で，よくある人間的な生活である。また「飲む，打つ，買う」の三拍子も揃つており，ごく普通の人間の欲望を充足させるものであろう。そして，メフィストにただひとり褒められた「阿呆」の考えは，まず地所を購入し，農業，牧畜など自然に根付いた生活を理想とする，城主のような生活である。確かにひとつの理想郷にも等しい，賢い選択のように思える。

5. ファウストと宝：メフィストはファウストに三つの誘惑を提示する。①大都会での満ち足りた市民生活 ②淫蕩生活に耽る享樂の城主 ③天上界を慕う崇高にして大胆な生活。どの生活でもファウストのために叶えてあげよう，というものである。ファウストはこの誘いをきっぱりと否定し，

四番目のものとして行為（事業）(Tat) を主張する。(10135～10188/④「高山」)「断じて違う。この地球上には、まだ偉大な事業をなすべき余地が残されている。驚嘆すべきことを成就するのだ。……支配するのだ、この手で握るのだ。事業が全てだ。名声は取るに足らぬ。」(10181～10188) どのような生活を最上とするか、それは、生きる上での「宝」であると言えるが、ファウストはその宝を、「行為すること」(事業)と決断したのである。具体的には、海を干拓し、広い土地を獲得し、自由な民と共に自由に生活することを夢に見ている。「おれはこういう群れをまのあたりに見て、／自由な土地に自由な民とともに生きたい。／そのとき、おれは瞬間にむかってこう言っている、／『とまれ、おまえはじつに美しいから』と。」(11579/⑤「宮殿の広い前庭」)メフィストとの契約にある、言っただけの言葉で済ませようとするファウスト。また、ファウストは全身全霊をあげて人類最高の段階を窮めようとした、最高のものを目指す人であった。この己の人生に対する姿勢は、やはり宝と評すべきであろう。「そして全人類が受けるべきものを、／おれは内なる自我によって味わいつくしたい。おれの精神で、人類の達した最高最深のもの (das Höchste und Tiefste) をつかみ、／人間の幸福と嘆きのすべてをこの胸に受けとめ、こうしておれの自我を人類の自我にまで拡大し、／そして人類そのものと運命を共にして、ついにはおれも砕けよう。」(1770/「書斎」)ファウストはまさに超人的な人である。そして常に、武者震いするような感動する心をもって事に当たった。「でもおれは石のような無感動に救いを求めはしないぞ。／戦慄は人生の最上の宝 (der Menschheit bestes Teil) だ。」(6271/①「暗い廊下」)ところが、その巨人ファウストも、「憂い」(Sorge) の存在には勝てなかった。「憂い」は言う：「誰でもわたしがとりこにすれば、／その人には世界ぜんたいが無意味になる。／中略／およそ宝 (Schätze) と名のつくものを、／わがものとすることはできなくなる。」(11453/⑤「真夜中」)ファウストはこの「憂い」に息を吹きかけられ、盲目となる他はなかったのである。

### 第三章 美と宝

1. 金の象徴：宝物の中でも「金」は特別な輝きとその意味をもっている。その輝きの持つ不可思議な「美」の作用に注目すると、種々の象徴が浮かび上がってこよう。衣服などにおいて金は、正装や晴れ着といった意味合いで用いられる。「赤の上着には金のふちどり (in rotem, goldverbrämtem Kleide), /パリッとした絹地のマント。」(1536/「書齋」)これは、メフィストが二度目にファウストの書齋を訪れたときの服装で、貴公子のいでたち。僭帝の天幕に宝を掠め取ろうと潜り込んだくすねは：「金糸でふちどりした真赤なマント (den roten Mantel goldgesäumt) よ。/わたし、こういうのが欲しくて、夢にも見たのよ。」(10793/④「僭帝の天幕」)と女性らしいところを見せる。また、正餐の食卓を飾るのも金であろう。「陛下が食卓におつきになれば、わたしが金のお手洗い鉢 (das goldne Becken) を捧げ持ち、/……わたしが陛下の御指輪 (die Ringe) をおあずかり申します。」(10894/④「僭帝の天幕」)これは宮廷の侍従長の言葉。献酌奉行も、「帝室用食器としてわたくしは、ことごとく金や銀の/豪華な器 (mit Prachtgefäßen, gülden, silbern allzumal) を取り揃えますが、/陛下の御用としては、いちばん優美な高杯を用意いたします。」(10918) 運命的な出来事を象徴する厳肅さを表現しているものとして：運命の女神のなかで一番の賢者、アトロポスが使っているのは、「黄金 (こがね) の鋏」(die goldene Schere) (8958/「スパルタのメネラス王の宮殿の前」)。生贄を載せる卓は、「四隅に金の尖がりのある贄卓 (にえづくえ)」(dem Tragaltar, dem goldgehörnten) (8939)。黄泉の国に導くのは、ヘルメスの「金の杖」(der goldne Stab) (9117)。生死に関わる、運命的な「金」の輝きは、厳肅な、靈妙な「美」の世界から発するもののようにある。また、生命そのものを寿ぐものとしても「金」は最適であろう。メフィストが「書齋」の場で学生に論ずる言葉は：「いいかい、きみ。すべての理論は灰色で、/みどりに茂るのは生命の黄金の樹 (des Lebens

goldner Baum) だ。」(2038/「書斎」)であった。メフィストは「庭」の中での散歩で、お相手のマルテに諺を持ち出す。「諺に言いますね。自分のかまどと／よい女房は、金と真珠 (Gold und Perlen) の価値があるって。」(3155/「庭」)。「ワルプルギスの夜の夢」には、「オーベロンとチャーニアの金婚式 (goldne Hochzeit)」という副題がついている。触れ役は、「金婚の祝い (daß die Hochzeit golden sei) をしますには／五十年の歳月を重ねなければなりません。／けれどお二人の夫婦喧嘩のおさまったのが、／わたしにはなおさらうれしい黄金 (das Golden) です。」(4227/「ワルプルギスの夜の夢」)と、間狂言の口火を切る。また、危険をもものともせず、自由を求め、戦争をも辞さないオイフォーリオンに対して、合唱の娘たちは諫める。「もうすぐ取り入れの／季節が来ます、岡のなぞえで／葡萄を摘みましょう、／無花果や黄金いろの林檎 (Apfelgold) をつみましょう。」(9829/③「城の中庭」)生命は黄金の林檎、命を無駄にするな、ということであろう。

2. オイフォーリオンと少年御者：そのオイフォーリオンは、同じ「城の中庭」において、フォルキアスによって次のように描写される。「手には黄金づくりの豎琴 (die golgne Leier) をもっている。まるで幼いアポロ神といったところ。」(9620)。「それも道理。その子のお頭は、まるで後光のような輝き (leuchtet's ihm zu Haupten) につつまれている。なんで光るのか、それはよくわからない、／金の飾り (Goldschmuck) のせいかな。強い精神力の力が炎となって燃える (Flamme übermächtiger Geisteskraft) のか。」(9623)「黄金の豎琴」を持つ幼いオイフォーリオンは、「いままでにないような美を創造する人になるだろう。」(9626)とフォルキアスに予言されている。頭の周りには後光が差しているのである。イカルスのように墜落するオイフォーリオンにも後光が見られ、ト書きが説明する。「(空へ身を躍らす。衣装が一瞬かれを支える。頭から輝きを発し (sein Haupt strahlt), 光が尾を引く (ein Lichtsschweif zieht nach))」

(ト書き) (9901) 「(……しかし、肉体はすぐに消え、光輪 (die Aureole) が彗星のように天に昇る。衣服とマントと琴だけがあとに残る)」(ト書き) (9903) オイフォーリオンは「金の輝き」として、天才的な詩人として讃えられている。後光や光輪、あるいは光背は昇天した聖者の印し。精神的、宗教的高みを具現する。金はその輝きの本質なのである。ファウストが「夜」の場面で、ノストラダムス自筆の神秘の書をひもとき、大宇宙のしるしを見て、「天のもろもろの力が上がり下がりして、／黄金のつるべ (die goldnen Eimer) を渡しあっている。」(449/「夜」)、と感激する。天上世界の、聖なる金というものがあるのであろう。

一方、カーニヴァルにおける少年御者も詩を象徴する。富の神プルーツと共に登場し、「四頭の龍に曳かれた立派な車」を操る。少年御者は、自分はプルーツにも劣らない、無限の富の所有者だ (unermeßlich reich) (5576)、と自信满满である。触れ役に、それを証明してみろ、と言われると、「じゃこれをごらん。ほくがちょっとこう指をはじくと／もう車体のまわりにびかびかきらきら光が走る (glänzt's und glizert's)。／ほら、真珠の紐 (Perlenschnur) が飛び出した。／(あちこちに向かって指をはじく)／さあ、取んなさい、金の頸飾りに耳飾り (goldne Spange für Hals und Ohr) だ。／非のうちどころのない冠と櫛 (Kamm und Krönchen)、／どの指輪にもすばらしい宝石 (in Ringen köstlichstes Juwel)。／ときには小さい炎 (Flämmchen) も進呈します。／どこかに燃えつけばいいと思ってね。」(5589) と、指をはじきながら宝石をばら撒く。この場面は、少年御者(詩人)の世人に贈る贈り物は、みな素晴らしい宝物(詩)であることを物語っていよう。しかも小さな炎は詩人の靈感で、他の人々の心に、詩のころという火を着けるのであろう。「指をバチンとはじきさえすりゃ、金銀財宝 (Kleinode) が飛び出してくる、まるで夢をみているようだ。／それを男も女も広間の中で奪い合う。」(5592) と、触れ役に語られる。

3. リュンコイスと宝：リュンコイスは鋭い眼力の持ち主で、「山猫の眼を持つ者」の意を持っている。伝説上は、黄金の羊毛皮をコルチス (Kolchis) からギリシャに運んだ、アルゴ―船の英雄たちの一人で、監視者の役を受け持っていた。地下に埋蔵されている物をも見通せる鋭い視力を持っていた、とされる。「ファウスト」においては「望楼守」 (Turmwärter) の役であるが、その眼力は同様である。ヘレナの前で、「私は金銀財宝 (Schätze) をかぎつけました、／この鋭い眼が案内役です。／どんな袋も、どんな／長持ちも見通しました。」(9301/③「城の中庭」)と、これまでの過去を語る。「こうして黄金の山 (Haufen Goldes) を手にいれました。／いちばんすばらしいのは宝石 (Edelstein) です。／お妃さまのお胸を飾るには、／この緑玉 (エメラルド) (Smaragd) にまさるものはありませんまい。」(9305)「こうして最上の宝もの (den allergrößten Schatz) を／おん前に持参いたしました。／数多くの血なまぐさい戦争の獲物 (die Ernte) を／おんもとに捧げます。」(9313) 神とも紛うヘレナの圧倒的な美の前に、リュンコイスは、これまで集めてきた全ての宝を投げ出す。「夜更け」の場面で、「見るために生まれ、見る役を仰せつかり、塔を守って見張っておれば、さても世界の面白いこと。……」(11288/⑤「夜更け」)と、歌っているように、リュンコイスは観察者であり、純粹認識者であるが、行為者ではあり得ない運命にある。その観点からは、リュンコイスの集めた宝は、科学的探究の道で得た素晴らしい宝、学問的認識というこの上ない成果を意味しよう。しかしながら、ヘレナの美は、それを遥かに上回る。リュンコイスは完全にヘレナの前にひれ伏している。

4. ヘレナと宝：ヘレナの美を讃歌する者は、ヘレナを護る合唱隊の女たちと、リュンコイスとファウストであろう。合唱隊の女たちは、ヘレナを慰めて言う。「おお、たぐいなお妃さま、お身にそなわっていらっしやる／この上ない貴いもの (das höchste Gute) を、おさげすみなさいますな。／いちばん大きいしあわせ (das größte Glück) はあなたおひとり

に授かりました。／お美しいということ、その誉れにあなたほど恵まれている方がありましようか。」(8516/③「スパルタの……」)「さあ、たえず数を増している見事な宝 (Schatz) をごらんになって、／お眼もお胸も晴れやかになさってくださいまし。／中略／お妃さまの美しさが、金や真珠や宝石 (Gold und Perlen und Edelgestein) と／合戦なさるありさまこそ、さぞかし見ものでございましょう。」(8560) リュンコイスも、「あなたが玉座にお登りになっただけで、／知恵も富も権威 (Verstand und Reichtum und Gewalt) も、／たぐいのないお姿の前に／頭をさげ、身がかがめるのでございます。」(9321) と讃える。ファウストも、「この城内におさめられてあるものは、すでにみなお妃のものだ。／特別のものを選んでさしあげるのは／無用のことだ。」(9335) と、語る。「この城内におさめられてあるもの」とは「城 (die Burg) の懐 (Schoß) にある 全てのもの」のことで、城は、「我らが神は堅きやぐら」(Ein' feste Burg ist unser Gott.) (ルターの言葉) の城と解釈すれば、ヘレナはすでに女神として崇められていることになる。その懐にはすでに全てがある。ヘレナは世界そのものであり、宇宙そのものを意味することになる。最大限のヘレナ讃美である。リュンコイスも更に、「なにしろこの城の宝も人間も (Gut und Blut)、／このお美しさのご威光になびいているのですから。」(9348) と絶大なる讃辞を送る。美という宝、ヘレナ。神とまで崇められるヘレナである。今やヘレナを獲得したファウストであるが、その道程は困難を極めたはずである。メフィストは言っている。「なにしろ、美という宝 (Schatz, das Schöne) を掘り出すには、／最高の技術、賢者の秘法がいりますからね。」(6315/①「まばゆく灯された数々の広間」)

5. アウロラの恋：去り行く雲を眺めながら、「あれはユーノーか、レダか、ヘレナか。」(10051/④「高山」) と、ファウストは感嘆の声を上げる。第四幕、「高山」の冒頭の場面である。ファウストを運んだ雲が、今や、巨人のように大きな、女神にも似た女人の像となって離れて行く。や

がて雲の形は乱れ、崩れてゆく。そこにファウストは、移ろいやすい日々  
 の大きな意味を知る。そして青春の日々の想い出が蘇える。「気のせいだ  
 ろうか、あの愛らしい姿は、／遠い昔に失った、わたしの若い日のこよな  
 い宝 (höchstes Gut) ではあるまいか。／心の奥底にひそんでいた青春の  
 日の貴い思い出の数々 (frühste Schätze) が湧きあがる。」(10058) 貴い  
 思い出の数々とは「青春の日の宝」と表現される。「そうだ、あれはおれ  
 のアウロラの恋 (Aurorens Liebe) だ、わけもなく胸をときめかせた初  
 恋だ。／すぐに心と心はかよいながら、まださだかな思いにはならない最  
 初のまなざしだ。／あのまなざしこそ、とどめておくことができるなら、  
 どんな宝の光もうばってしまう宝 (Schatz) なのだ。」(10061) 「ああ、あ  
 のやさしい姿は、美しい心のように高みをさして昇ってゆく。／解け散ら  
 ず、変わらぬおもかげのまま、大気のなかへ昇ってゆく。／そしてわたし  
 の心の中の最善のもの (das Beste meines Innern) を、自分といっしょ  
 に高みへ引き上げるのだ。」(10064) アウロラはローマの、オリオンに恋  
 した曙光の女神である。アウロラの恋とは、従って、淡く、はかない初恋  
 を象徴する言葉となろう。初恋は、「美しい心のように (wie  
 Seelenschönheit) 高みをさして昇ってゆくものであり、我々を高みへと  
 引き上げるものなのであろう。まさにこよない宝である。

#### 第四章 自己と宝

1. 地下の宝と無意識：ファウストのために金融再建に乗り出したメフ  
 イストは、金が皇帝の領土内に無尽蔵に埋蔵されていることを指摘する。  
 「金 (Geld) はなるほど床にしゃがんで掻き集めるといふわけにはいかな  
 い。／だが知恵さえあれば、どんな深いところからでも取ってこられます。  
 ／奥山の鉱脈にも、建物の土台下にも、／金貨やら金塊やら (Gold  
 gemünzt und ungemünzt) が寝ております。／ところでそれを誰が掘り  
 出すのかとお尋ねなら、こうお答えます、／才分ゆたかな人物の天賦と  
 精神の力だと。」(4891/①「玉座の間」) ここではすでに、鉱物としての

金が、我々の心の中で一番大切な宝として表現されていると解釈できよう。更にメフィストは：「おびただしい宝（Schätze）が、ご領土全域の／地下深く、利用されずに、／眠っております。……／深く事物の根源を洞察することのできる人間は、／無限のものに無限の信頼をよせるのでございます。」(6111/①「遊苑」)と述べ、宝は心の問題であることを指摘している。帝国領土全体を、我々の心の領域と置き換えれば、心は無限の広がりを持つものとなろう。その地下は無意識世界ということになり、そこに眠る宝を掘り出すことのできる人間は、事物の根源を深く洞察できる者のみとなるであろう。暗闇の世界を知るメフィストは、「金や宝石（Gold und Juwelen）ばかりじゃない、／こういう貴い、いろいろお酒の精の精といったものも、／ものすごい暗闇につつまれている。／その暗黒を賢者は根気よく探ります。／昼間物を見分けるなんて、そんなことは誰にもできる。／神秘的なもの（Mysterien）は地下の暗黒にこそ眠っております。」(5027/①「玉座の間」)と、昼間の意識世界に対し、真の宝の探求は、暗闇の無意識世界にあることが強調される。

2. 海と無意識：海も地下の世界と同様、無意識の世界に譬えられる。旅人が命の恩人であるパウキスとフィレモンを訪ねる場面で、広大な海を前にして旅人は言う：「では、あすこへ行ってみていいでしょうね。／果てしない海（das grenzenlose Meer）を眺めることを許してください。／わたしはひざまずきたい、祈りたい。／胸がせまってきて、そうせずにはいられないのです。」(11075/⑤「広々とした土地」)「果てしない海」は「無限の海」と表現され、無意識世界の無限の大きさを意味しよう。その海（無意識）を前にしては、何人も、跪き、首を垂れて祈り、畏怖の念を禁じえないであろう。航海から帰って積荷が陸揚げされ、海賊業で得た成果を自慢するメフィストは、海を讚美して：「海は自由だ、人間の心を自由にする。／そこへ出りゃ分別（Besinnen）などに誰がかまっているものか。」(11177/⑤「宮殿」)と言う。海賊業という反社会的な行為がで

きるのも、人間の心を自由にする海がそうさせるのである、という弁解ともなっている。しかし、「分別」とは意識的行為のことであるから、海という壮大な無意識の中では、分別という意識的世界が消えてしまう、ということにもなり、意識世界が如何に小さいかを思い知らされる。ファウストの干拓事業は：「あの専横な海を岸からしりぞけて、水面の領域を狭め、海を遥かの沖まで追いやる。」(10229/④「高山」)ことで、海と戦って勝ちたいという願望であり、快樂 (Genießen) である。それは生命の揺籃であり、自然そのものを象徴する無意識という海を、わずかばかりながら意識化することであり、人間の意識的行為によって自然を支配しようとするものであろう。

その無意識の海にも宝が潜んでいる。メフィストの口から「海中の宮殿」(Paläste) (6012/①「遊苑」)について語られるが、その中心にいるのは皇帝である。皇帝を持ち上げて、取り入ろうとするメフィストの老獪な話術ともなっているが、「至高の冠」(Diadem) (10989)を戴く皇帝が無意識の海を中心、即ち心の世界を支配する中心人物として、「自己」を象徴するには相応しいといつてよいであろう。宮殿は、真珠に満ちた海底 (perlenreicher Grund) となっていて、金の鱗の龍たち (goldbeschuppote Drachen) が泳ぎ、海の神ネーロイスの娘たちは物珍しげに、ぴちぴちした魚 (Fische) のように近寄って来る。この魚は後に「世の常の魚とは違ったもの」(mehr als Fische) (8069/②「エーゲ海の岩にかこまれた屈曲の多い入り江」)であると、ネーロイスの娘たちが自ら語っているように、「自己」を表すと考えられる。同様に、グレートヒェンが着物を脱ぎながら歌った、「トゥーレの王」の歌に出てくる「金の杯」(ein goldner Becher)も、海との関連から言えば、「自己」を象徴するものと考えられよう。「そしてその宝のさかずき (der heilige Becher) を／潮のなかに投げ込みました。／さかずきは波にのまれ、波をのみ、／海底深く沈みしました。」(2777/「夕」)王が今はの際に海に投げ込んだ杯は、妃が王に先立ったときの形見の金の杯であった。無意識の海の中に帰る自己自身であろう

か。王も妃も共に、生命の生まれた本源の海に戻るといふことであろうか。また、「自己を失う」といふ喪失の感情も伴う。それはあたかも、自己を見失った現代人をも想起させることではある。海深く沈んだ自己は、取り戻されねばならない。この「自己の奪還」は意外なところで描かれているとも言えよう。「あ、フィレモンさんですね、たくましい力で／わたしの宝 (mein Schatz) を波間から引き上げてくださったあの方ですね。」(11069/⑤「広々とした土地」) 船が難破して、砂浜に打ち上げられ、パウキスとフィレモン老夫婦に助けられた旅人が、フィレモンに出逢って言った言葉である。「わたしの宝」とは、そのとき携えていた「宝」の意と捉ることもできるし、旅人自身、即ち「生命」といふ宝を助けてもらった、と捉ることも可能であろう。それは一度は沈んだ「金の杯」であったかもしれないし、「自分自身」といふ「自己」が救われた、と表現してもよいものであろう。この場合、「生命」と置き換えることのできる「宝」としてである。

3. 自我と自己 (注) : ファウストは「夕」の場で、「あわれなファウストよ。おれにはもうおれというもの (dich) がわからない。」(2720/「夕」) と、自分で自分に呼びかけている。ヘレナも、「いまでさえ、どれがほんとうの自分なのか (welche denn ich sei), わからずにいるわたしなのに。」(8875/③「スパルタの……」) と、自らを省みる。これは、「今、意識している自分」と、それとは別に、それが自分であると感じさせ、思い込ませている「本当の自分」といふものがあることを、意味しよう。この本当の自分こそが「自己」と名づけられる「宝」に他ならない。それは地中深く眠る地下の宝に譬えられるものであろう。これまで考察してきた、金銀財宝の多くの宝は、この「自己」の概念に出会うとき、最も素晴らしい輝きを発していよう。またそれは、無限の海の底に潜む「宮殿」であり、「魚」であり、「金の鱗の龍」であると譬えられているものでもあろう。ファウストはこの自己を、我々の無意識世界に君臨する「神」とも呼んでい

る。「おれのこの胸のうちに住んでいる神 (der Gott) は、／おれのたましいの奥底を搔き立てることはできる。／その神はおれのもつあらゆる力に君臨しているのだが、／そのくせ外界のものは何ひとつ動かすことができぬのだ。」(1566/「書斎」)と語り、外の世界に対して、確かに直接的な力はないものの、心の中に君臨する神、即ち「自己」の存在に気づいている。ここに、「自我」と「自己」との関係がある。「自己」を金銀宝石に譬えられる「宝」とするならば、この関係についての考察は重要な意味をもつことになろう。ファウストの言葉：「いまわたしに残された道はただ一つしかありません。わたし自身と／今までおこがましくもわたし自身のものとして信じていたいっさい (alles, im Wahn das Meine,) を、あなたにおゆだねすることです。」(9268/③「城の中庭」)「限りないご領国 (deines grenzunbewußten Reichs) を統治する／協力者としてのわたしをお認めください。／身は一つですが、あなたのために／崇拜者、従者、護衛者を兼ねることをお許しください。」(9362) これは、ヘレナに対しての完全な帰依を表白しているが、ヘレナを我々の心の中の「自己」、ファウストを意志する「自我」と把ることもできよう。「自分自身のものとして信じていた一切」とは、我々の「自我」は「本来無一物」であり、何ひとつ自我の所有するものはないのであり、ヘレナの「限りないご領国」とは、「無限の無意識領域」をも意味し、ファウストは「自我」として、ただその協力者、崇拜者、従者、護衛者であるにすぎない。仮装舞踏会の場面で、象を御している「賢さ」(Klugheit) という女性が登場する。「恐怖」と「希望」を鎖に繋いで引き連れている。この「賢さ」を、我々の行動に際しての賢明な意志、即ち、「恐怖」のように悲観的にもならず、「希望」のように楽観的にもならず、正しい振舞いをしようと心がける「自我」と考えるなら、その限りにおいてこの自我は、われわれの心における支配者のように思われる。ところが、この象の背には勝利の女神ヴィクトーリアを乗せた塔が聳えている。「女神をつつむ栄ある光 (Glanz und Glorie) は、／遠くあまねく照りわたっている。／その御名はヴィクトーリア[勝利]、／この

世のすべてのいそしみごとの女神 (Göttin aller Tätigkeiten) です。」(5453/①「大広間と……」)と、「賢さ」自身に紹介されるように、この勝利の女神こそが、「あらゆる行為の女神」であり、真の行為を生み出す「自己」なのであろう。同様に、少年御者が操る「四頭の龍に曳かれた立派な車」(5512)においても「自我」と「自己」の関係が明らかとなっている。少年御者が龍たちに言う：「龍よ、翼をやすめろ。／いつものように手綱にしたがえ、／わたしはお前たちに命令する、お前たちは自分自身に命令しろ (Meistert euch, wie ich euch meistre.)。／わたしが拍車をかけたら、また走れ。」(5520) 富の神ブルートゥスに言う：「わたしはあなたから疾風のような／この四頭立ての龍車を任せられた者ではないでしょうか。／それをいつもお指図どおりに (wie du leitest) うまく御してはいないでしょうか。／お望みの場所にぴたりと着けることができないでしょうか。」(5520)「少年御者」の命令に「龍」が従い、それに「車」が従う。その限りにおいて、意志の働き通りに「手足が働き」、行為が成り立っていよう。しかし、それはまだまだ「自我」のみの領域であらう。結局は、ブルートゥスという「自己」の指示通りに働いていた自分であった、と少年御者は自覚をしている。ここに、自己の命じるままに働く自我があり、意志と意識の多重性が感じられる。

4. 自己探求の道：その自己は、意識する自我からはなかなか認識することのできない自分であらう。自分自身のものでありながら、それと気がつかぬものである。この自覚から、「本当の宝」、即ち自己探求の道が始まる。「造作もないことでございます。しかしその造作もないことがむしろかしいので。／目当てのものはそこにある (Es liegt schon da.)。だが、それをどう手に入れるか、／それが術で。さて、誰がそれをやりますかな。」(4928/①「玉座の間」)とは、宝に精通したメフィストの言である。地下の宝は、すでにそこにある。それはもう自明のことである。極めて簡単なことである。しかし、それをどう掘り出すか、それが難しい。では、その

難しさはどこにあるか。メフィストは言う：「だが、宝のありかに通じた者は、／あのお世のお隣まで (zur Nachbarschaft der Unterwelt) 進んで行かなければなりません。」(5016) 冥土、黄泉の国と呼ばれるところの境界まで、「死」とすれすれのところまで降りて行かなければならないというのである。しかもそれは、他人任せではなく、自分自身の努力で獲得しなければならない。皇帝に向かって言う：「いいえ、陛下ご自身が鋤と鍬を取ってお掘りくださいませ。／百姓の業をなさることは、陛下の偉大さをいや増します。／そのとき金の仔牛は群れをなして (eine Herde goldner Kälber), /地の底から躍り出しましょう。」(5039) 皇帝も、皇帝の領土の地下にある宝も、これは我々一人ひとりのことと、考えることができる。我々は誰でも、心の王国の王であり、皇帝である。真にこの宝を得たときに、誰でもが王冠を戴いた皇帝に成り得るのである。ファウストは二度大きな冒険を試みている。最初は、空間も時間も存在しない「母たちの国」に赴いたとき、二度目はマントーに導かれて、冥土の女王ペルゼフォーネのところに向かったときである。危険を顧みない、自己の獲得を目指してのファウストの冒険であった。

5. 自己と宝：「アウ。アウ。アウ。アウ (Au! Au! Au! Au!)。」(2465/「魔女の厨」) これは、見知らぬ者が侵入したものと勘違いをして、魔女がメフィストとファウストに向かって発した叫び声である。「アウ」は、AU = Aurum, 即ち、化学でいう元素記号の金 (Gold) を意味する。「不老長寿の薬」を処方できる魔女は錬金術師でもあり、その叫び声は「金だ、金だ、金だ、金だ！」とも把れる。錬金術の目的は、卑金属から金を造り出すことと同時に、その作業を通して、我々の心の無意識に潜む真の「自己」を発見することでもある。魔女の叫びは従って、「金という宝が問題」、「自己という宝が問題」と聞こえよう。現実的にはしかし、この金の製造、あるいは金の採掘は困難を極める。ファウストはワーグナーに対する批判として、「手を鍬代わりにして宝 (Schätze) をかっぼじくろうとし、／そ

のあげく、みみずを見つけて喜んでいるのだ。」(604/「夜」)と評する。メフィストは「わしは埋もれている純金の宝を探しに出て (nach verborgen-goldnem Schatze), うすぎたない炭を手に入れて帰ったのだ。」(6766/②「高い丸天井をもつゴシック風の狭い部屋」)と、以前学生であった得業師と再会して、やや自重気味の発言をする。「みんな精出せ、／うごめく仲間、／目当ては金 (Gold) だ、／屑石 (くず) にはむだに骨折るな。」(7598/②「ペナイオス川の上流」)これは金の採掘に勤しむ蟻たちの合唱である。このように本物と贋物とは区別されねばならない。では、本物の金とは、本当の自己とはどのようなものであろうか。更に、作品中から掘り出してみよう。「闇に生まれ、闇のもの一族で、／誰にも知られず、自分にさえ知られていない (uns selbst, ganz allen unbekannt) ようなわたしたちなのだから。」(8010/②「ペナイオス川の上流」)という、闇の女のフォルキアスたちの言葉は、自己の本質を物語るものであろう。「自然が自分で自分を (sich in sich selbst) 築いたとき、／素直に地球を丸く仕上げた。」(10097/④「高山」)、というファウストの自然観の中には、自然自らの生成力とともに、自らを生む「自己生産性」というものが感じられよう。しかも丸く、球をなしている。カビーレンの神々も「どこまでも成長しようとなさいます、」(8203/②「エーゲ海の……」)と描写されているように、自らを生み、成長しようとする力を感じる。次に、金は様々に変容を遂げる、というメフィストの言葉を採用しよう。「そうだ、金 (Gold) を粘土のようにこねて、いいものをつかってやろう。／なにしろこの金 (Metall) というやつは何にでも化けるからな。」(5781/①「大広間と……」)自己も金と同様、様々に変容を遂げ、また変容そのものの象徴ともなる。従って、様々な事柄が自己の象徴となっていよう。上述した「宮殿」, 「魚」, 「龍」, 「杯」も然りであり、キリスト教の伝統に従えば、イエスそのものも自己を象徴すると考えられるから、イエスを象徴する事柄は全て、自己を象徴することになり、「ファウスト」中においても、その象徴が多数見られる。その中でも「金」と「宝

石」は、こころの中の宝物として、自己を象徴する代表的なものとなろう。次に、「灯」、「火」、「焰」、「雷」も自己の性質をよく表している。「ランプがいつものようにやさしくともると、／おれたちのこの胸、／この心は、自分をとりもどして（das sich selber kennt）明るくなる。」（1195/「書齋」）むく犬を連れて書齋に戻って来たファウスト。あたりは既に暗い。ランプを点すと心も明るくなる、という意味なのだが、「自分自身を知っている心の中で、明るくなる」と表現されていて、「灯」は心の中の「自己」を暗示している。「焰」とは自分自身を材料にして、自分自身が燃えることである、と解釈すれば、まさにそれは自己自身のことであろう。この同じ「灯」はしかし、「夜」の場面で、遠ざかる「灯」として描写される。「あすこの教会の祭具室に／常夜灯（das ew'ge Lämpchen）がともって、窓の上のほうだけが明るいが、／光は窓を遠のくにつれてしだいに弱くなり、／ついには闇に吞まれてしまう。／ちょうどそのように、おれの胸のうちは真っ暗だ。」（3650/「夜」）常夜灯とは「真っ暗な無意識」の中で光る「自己の光」のことであろう。常に消えることはない。気持ちが憂鬱になったときには、胸のうちは真っ暗となるのは人の常であるが、心のどこかに光っているもの、それが自己であろうか。また、詩のアレゴリーであると自ら名乗った「少年御者」の言葉：「浪費（Verschwendung）ですよ、わたしは。つまり詩ですよ。／自分のもっているいちばん大切なもの（sein eigenst Gut）を惜しげなく浪費することで、／自分をほんとうの存在にする（der sich vollendet）詩人なんだ。」（5573/①「大広間と……」）も、自ら完全燃焼する「焰」として自己を意味しよう。その意味では、自らを燃焼させる存在として忘れてはならないのが、太陽である。メフィストが小声でつける台詞を喋る天文博士は、「およそ太陽は純金（lautres Gold）でございます。」（4955）と語る。錬金術と天文学がぐるになっているが、その表象は正しいように思われる。漆黒の暗闇のみが自己の住処ではなく、白昼に輝く太陽はそれ自体ですでに自己であり、自己の象徴である。さて、その太陽が作り出す「虹」の姿は何とも美しい。太陽

も虹も、人間にとってはまさに「宝」である。「では太陽よ、おれはおまえをうしろに負おう。／中略／あれにこそ人間のいそしみは映し出されているのだ。／この虹のもつ意味を考えてみよう、そうすればもっとよくわかってくるだろう。／本源の光の色さまざまな反映 (am farbigen Abglanz) それがわれわれの生なのだ。」(4715/①「優雅な土地」) 滝の水は絶えず変化し、躍動している。その変化の中に七色の虹が映る。絶え間ない変化である現象界の中に、絶対なるもの、永遠なるものが映し出されているといえよう。ファウストのアルプスの麓におけるこのモノローグから、人間の有限の生も、現実世界の中の彩りに溢れた実人生として捉えることができるし、そこに永遠なるものを感じとることができよう。この虹こそ、彩り豊かな現象として顕現した、素晴らしい自己であろう。このように、自己というものは様々に譬えられている。むしろ比喻によってしか表すことのできないものでもあろうか。あえて一様に窺い知ることができることは何か、といえば、それは宝物のような輝きをどこかに秘めているものであり、素晴らしい宝として感じ取れる何物か、ということになるうか。即ち、自己とは宝である、と表現できよう。

それでは、その自己は如何にして獲得することができるか、次に考察してみたい。「簡単であるが、難しい。」とは、メフィストの言葉であった。ここに秘密が隠されているように思われる。ヘレナを護る合唱隊は、「外の世界にかがやく日の光なんか消えてしまったっていい、／魂のなかで夜が明けるなら。／世界じゅう捜しても手に入らないもの (was die ganze Welt versagt) が／自分の胸のなかに見つけられるようになるでしょう。」(9691/③「城の中庭」) と歌っているが、ここでも真の自己の発見が求められている。「全世界が拒むもの」とは、まさに心の中の宝物、即ち自己のことであろう。全世界が拒む程、それ程入手困難なものでもあるが、それだけ一層素晴らしいもの、ということになるうか。それではやはり、真の自己に到達する道は難しいのか。いや、そうではないようである。次の魔女の言葉を味わって欲しい。「それ、高き力は、／学術にも／全世界にも

(der ganzen Welt) 隠されたり。／ただ思量せざる者 (wer nicht denkt) には、／授けらるべし。／労することなくそれを得ん。」(2567/「魔女の厨」)「高き力」は崇高な力をもった「自己」のことと解せよう。魔女の言うには、その自己の獲得に際しては、一切の思考を止揚せよ、ということのようで、そうすれば、全世界にも隠されているもの、科学技術の探求では得られないもの、即ち、自己という「高き力」が、いとも簡単に得られる、というのである。反論もあろうが、私はこの魔女の言葉を信じた。これを裏付けるものとして、「森と洞窟」の場面を挙げることができよう。ファウストはグレートヒェンとの愛が最高潮に達しようとしたとき、逃避行を演じる。森の洞窟の中に潜り込み、瞑想に耽る。そのときファウストは、いわゆる悟りの境地に入ったのである。地の霊に向かってファウストは語りかける：「お前はおれを静かな洞窟にみちびいて、／そこでおれというものをおれ自らに (mich mir selbst) 見せてくれた。するとおれ自身の胸にひそむ／深い神秘と驚異 (Geheime tiefe Wunder) が、覆いをとってあらわれたのだ。」(3232/「森と洞窟」) この言葉から「自己が開示された」ことを汲み取ることができよう。この場面では、森の中の自然と一体になったファウスト自身も描写されていて、「自己」即「自然」, 「自然」即「自己」, 「宇宙」と一体の「自己」が開示された、と解釈できよう。そこにメフィストが登場し、ファウストの瞑想的気分の邪魔をして言う：「なんだって、こんな岩の裂け目の洞穴に、／みみずくみたいにもぐりこんでいる (dich wie ein Schuhu zu versitzen) のです。」(3272) ファウストはみみずくのように坐り込んで、時を無為に過ごしている、という意味の言葉である。ファウストの悟りは従って、何もせずにただ坐り込んで、瞑想をしていたときに訪れた、ということになる。即ち、魔女の言ったことは真実となっている。また、ピラミッドの前に坐るスフィンクスも、ただじっと坐り続けている。「ピラミッドの前にすわって、／もろもろの興亡を見えています、／河の氾濫、戦争、平和——／けれどわたしたちは眉毛ひとつごかしません。」(7245/②「ペナイオス川の上流」)

地震が起きててもこでも動かないスフィンクス、ひたすら坐り続けるスフィンクスは、自己を象徴するピラミッドの護り神である。また、道行く人に謎賭けをして、問答に引き込む。メフィストに対しては：「あなたご自身のこと (dich selbst) を言ってごらんなさい、それがもう謎になりますわ。」(7132) と問いかけるが、この言葉は我々全ての人間に向けられた言葉でもあろう。自分自身とは何か？ 自己とは何か？ と問い詰めているのである。この場面は、「森と洞窟」の場面のファウストと同様、坐禅の世界を髣髴させるに十分であろう。即ち、自己が問題なのである。それはこれまで何度も引き合いに出した金、あるいは宝石とは何か？ と問うことと同等でもあろう。

6. 魂と宝：「ファウスト」では魂の不滅が描かれている。ファウストは死に、埋葬の場面となるが、ト書きには：(天使ら、ファウストの不死の霊 (Unsterbliches) を取りもち、それを運んで、空に昇る。) (11824/⑤「埋葬」) と書かれる。ファウストは死んでも、魂は生きていて、「不死なるもの」と記される。メフィストは結局、ファウストの魂を奪い損なってしまう。「青二才どもが、おれに不意打ちを食らわして、／獲物 (Beute) をさらって天に飛んでいきやがった。」(11825) と、メフィストは地団駄を踏む。この獲物とは無論、ファウストの不死の霊、つまり魂のことであるが、次に「宝」と言い換えられる。「おれは大事な、かけがえのない宝 (Schatz) を取られてしまった。／担保に入れさせた上等な魂 (Seele) を、／やつらはすりのようにすばしっこくさらって行ってしまったんだ。」(11829) 魂は宝なのである。最終場「山峡」においても、ト書きに：天使たち (ファウストの不死の魂 (Unsterbliches) をはこんで、より高い空中をただよう) (11934/⑤「山峡」) とあり、未成熟の天使たちには：「愛にゆたかな、聖なる贖罪の女性たちの／手から受けたあのはらの花が、／わたしたちを助けて勝利をかちとらせてくれました。／貴い仕事は完成され、／わたしたちはこの大切な霊 (Seelenschatz) を手に入

れることができました。」(11942)と、語られる。大切な霊は「魂の宝物」と表現され、魂は宝であると明言されている。ファウストの魂は、不死の霊として、大切な宝として、天に召されたのである。

#### 付記

「ファウスト」のドイツ語テキストは (Goethe Werke, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, Bd. 3, 11. Auflage, 1981) を使用した。引用箇所  
の表示はカッコ内に、はじめに開始行数を記した。次に第二部については  
幕数を①から⑤のように明示した。表示の無い場合は第一部である。最後  
に場面を表示した。日本語訳は、手塚富雄訳「ファウスト」、中公文庫全  
三冊 (第一部：1992年、第6版；第二部上巻：1991年、第4版；第二部下  
巻：1995年、第5版) を使用した。

注) 第四章 3. 「自我と自己」について：この用語の用法は、C. G. ユン  
グの思想に従った。ユングは自己を次のように定義している。「自己は中  
心であるだけでなく、意識と無意識の両方を包み込む円周全体である。  
ちょうど自我が意識的精神の中心であるように、自己はこの全体性の中心  
である。」(Psychologie und Alchemie, s. 59, C. G. Jung GW. Bd. 12, Walter-  
Verlag, 3. Auflage, 1981) また、「自己は意識的な自我の上位に位置して  
いる。……自己を少しでも意識化して捉えようとしても、その望みはない。  
自己の全体性に属している無意識の領域は、常に未知数で不可測だからで  
ある。」(Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten, s.  
187, GW. Bd. 7) とユングは述べている。従って、自己は様々に変容を  
遂げ、様々な象徴的手段をとって表現されることになろう。